◎特集　近代の編成原理
―イギリス、アメリカ、日本における組織、倫理、専門知◎

序

松原宏之

近代史の描き方に広範な再考が加えられ始めて久しい。思い切って大づかみに言うなら、二〇世紀中盤までを席巻した発展史に対して、豊かさや、自由や、解放の内実とは何だったかと問い返す諸潮流がまずは提起された。その上でさらに、歴史叙述の単線性を検討し直そうとする試みが活発である。本特集「近代の編成原理―イギリス、アメリカ、日本における組織、倫理、専門知」は、こうした歴史学の現在形を長い一八世紀のイギリス、二〇世紀転換期アメリカ合衆国、二〇世紀前半日本の具体的な場面に即して吟味していこうとするものである。

本特集の元になったのは二〇一五年六月二〇日（土）に開催された立教大学史学会大会での同タイトルのシンポジウムである。多くの参加者で盛会となった当日の報告をもとに三本の論文とコメンタリー一本を得た。

長谷川貴彦の「「底辺」からの産業革命―長い一八世紀イングランドの中間団体と貧民」は、右の問題関心に応えて福祉国家史を刷新する展望を示すものである。福祉国家への一元化過程を描いた福祉の単線的発展モデルを、「福祉混合体」史として描き直す構想である。とりわけ「底辺」からのはたらきかけとともにその混合体が生まれ再編されていく動態を重視するのが、新しい社会史とも呼ぶべき長谷川の着眼である。一六世紀イングランドの近世化過程から説き起こして見えてくるのは、貧民への伝統的セーフティーネットが弱体化する一方で、エリート層、中間層、貧民らが折衝を経て新しい体制を構築していく過程である。人びとがどのように生き延びうるかは社会の正統性の存否

とあり方に関わるのであり、かれらはやり繰りや請願や交渉を多種多様に重ねながら行政機構、法とその運用、そしてさまざまな民間団体の複合体をつくり出していく。この過程の複雑さから近代社会の新しい描き方が登場する予感があろう。

松原宏之の論文「医療、福祉、社会運動の境域で―二〇世紀初頭ニューヨークの訪問看護婦たちの活動に注目する。ニューヨーク市の低所得移民たちに提供されたそのサービスは、行き届かない行政の社会福祉施策を民間団体が担った福祉混合体の一事例であり、移民たちの生活の場に立ち入って中産階級的な規範を押しつけていくような側面を持っている。ただし、訪問看護という専門知に即して考え直すならばどうなろうか。いまだ十分な力量を持たない医学や、実効的な社会政策を施せない行政を前に、都市下層民のなかに入っていく看護婦たちは既存社会の不備や自分たちならではの貢献のあり方に気づいていく。専門性やジェンダーにおいても周縁化された者が、それゆえに従来の体制への批判者として立ち現れた。既存秩序の補完者としての側面と批判者としての顔がおり混ざる境域の経験から、近代社会のあり方を考える糸口を探そうとする。

よく噛んで食べよという教えに注目した宝月理恵は、衛生医科学という専門知をめぐる実践過程を検討していく。かつて、医科学は近代の科学化・進歩を支える代表的な専門知と考えられたし、身体を規律訓練していく拠点とも数えられた。しかし、権力の受け手の側において果たしてその規律はどこまで貫徹したのかが問われている。その規律が「習慣化」という過程でもあることに注目するならばどうだろうかという宝月の試みはこの批判の一翼をなすものである。論文「規律、実践、習慣化―戦前・戦時期日本における《咀嚼する主体の主観性》をめぐる試論」は、一九三〇年代前後から日本の学校衛生に導入された「咀嚼教育」に注目して、生徒たちの経験を追っていく。学校教育がある習慣を課したとしても、その習慣が持続するとは限らない。こどもは周囲との関係のなかである種の主体性を発揮もする。「規律訓練―主観化―習慣化」の動態を追うという展望が開けてくる。

高林陽展には、シンポジウム当日の報告に即したコメントを寄せてもらった。ミシェル・フーコーの議論をいまあらためてどう考えるかについての洞察とともに、三報告への批判を展開する手際は見事である。当日の議論の様子を伝える記録であるとともに、本特集の意義を考えさせる示唆に富んだ論考である。

時代をまたぎ、地域的にも三様の事例に、理論的な問い

かけを加えながら議論を深めたシンポジウムの成果である。味読いただきたい。

（本学文学部教授）